

“奥羽越”の戊辰戦争とは

加茂商議所 150年控え、米沢で歴史講演会

戊辰戦争で新政府軍に対抗した諸藩の動きにスポットを当てた歴史講演会「奥羽越列藩同盟と加茂軍議」が25日、伝国の杜で開かれた。遠くは福島や新潟など県内外から約120人が訪れ、戊辰戦争の意義や米沢藩の役割などに理解を深めた。

来年で戊辰戦争から150年を迎える中、歴史に埋もれた奥羽越列藩同盟の真実を掘り起こして光を当てようと、新潟県加茂市で、新政府軍の加茂商議所（太田明会頭）が開催。米沢藩の参謀甘粕備後や藩士雲井龍雄が大きな影響を与えたため、歴史の縁で米沢で開かれた。河井継之助記念館、新潟県長岡市、稲川明雄館長が講師を務めた。

奥羽越列藩同盟は、陸奥や出羽、越後の諸藩が新政府軍に対抗して結成した同盟。現在の新潟県加茂市で「加茂軍議」を開き、方針を決めたとされる。稲川館長は軍議について「2日間にわたり、東軍側では最大規模だった」と説明した。会津藩は新政府軍に恭順の姿勢を保っていたが、米沢藩の存在で一変。長岡藩の総督河井継之助が勝利の戦略を描き、甘粕が「上杉謙信公から続く義の



精神」から賛同したという。この際、加茂を訪れた

ていた雲井が新政府軍を批判して書いた漢詩「討薩ノ檄」が後押ししたとい

い、稲川館長は「助け合いをするのが日本という国家。新政府が詭弁を弄している」という雲井の思いは、正しかったので

奥羽越列藩同盟を考えた歴史講演会

は」と自説を展開。「負けたからとないがしろにはできず、勝つたから正義とは限らない。もう一度学ぶことが重要ではないか」などと強調していた。